

第3節 鳥取藩台場跡の研究序論

中原 齊（鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室長）

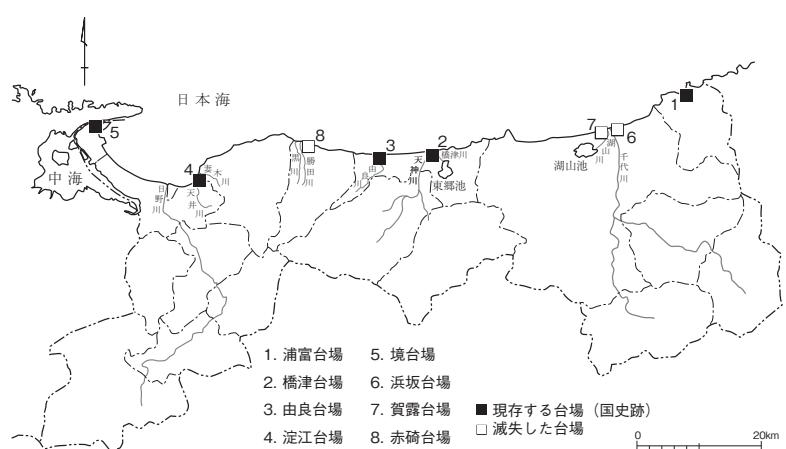
1. 幕末期の台場

江戸時代末期、国内外における情勢の急激な変化の中、文化5年（1808）のフェートン号事件や文政8年（1825）の異国船打払令にみるよう諸外国との緊張が高まるにつれ、海岸線を有する鳥取（因州）藩も、天保13年（1842）頃には藩内の各番所へ大筒を配備するなど、海防に力を入れている。また、嘉永6年（1853）のペリー来航を受けて、翌年にかけて幕府が築造した江戸品川の内海御台場のうち御殿山下台場の警備を安政5年（1858）まで担当した（鳥取県1979、富川2006）。ここでいう「台場」とは、幕府や各藩が築造した異国船の打払いを目的とする海岸砲台のことである。その後、文久3年（1863）5月が攘夷決行期限とされるなどの全国的な気運の中で、同年6月に大坂天保山台場での警備中に英艦に砲撃を加えるなどの経験も踏まえて、鳥取藩は国許での海岸防備の強化を緊急の課題とし、文久2年（1862）より本格的な台場築造を開始している。

鳥取藩では、日本海に面する因幡・伯耆二国の海岸線東西160km（40里）の内、枢要箇所8ヶ所、すなわち因幡国では浦留（富）、浜坂新田、加路（賀露・西浜）の3ヶ所、伯耆国では、橋津（長瀬）、由良、赤崎、淀江（今津）、境（上道）の5ヶ所に新たな台場を築造した（鳥取県1970、第44図）。これらの台場は、藩倉（灘御蔵）などの重要施設の防備が目的だったが、千代川河口を挟んだ浜坂、賀露の台場は、鳥取城の防備が主たる目的だったと考えられる。これらの台場は文久4年（1864）までには完成したようである。短期間で完成に導かれた土木工事は、城郭築造が久しくない中での一大事業であり、その費用も莫大であった。当時藩財政が逼迫していたこともあり、構築費用については地元農民の労役や大庄屋らの献金にかなりの部分を頼っている。完成後の台場防備も新たに編成された農兵隊等により行われた例もあり、台場は武士階級による幕藩体制の弛緩を象徴する存在でもある。なお、海岸防備の台場の他に文久3年に浜坂、中ノ茶屋、芦崎、西園、八橋の5ヶ所に野戦砲台の構築が計画され、翌年にはほぼ完成したとされるが、その実態は知られていない。

各台場には伯耆国由良湊近くの六尾村の反射炉で鋳造された大砲が配備された。しかし、設置された大砲は実戦で一度も使用されることなく、明治維新後の対外情勢の変化の中、明治3年（1870）に六尾村の反射炉の大砲製造具が鋳潰されたのと前後して、これら台場も役割を終えていった。

鳥取県中・西部にあたる伯耆国では、明瞭な遺構を留めていない

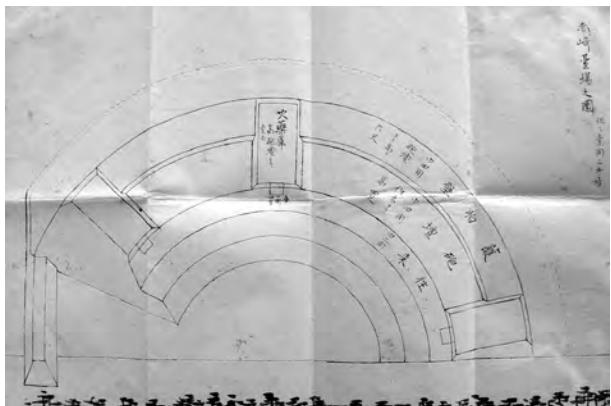


第44図 鳥取藩台場の位置図

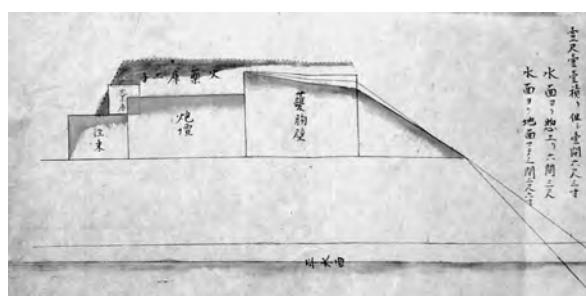
赤崎台場を除く境、淀江、由良、橋津の4台場が昭和63年（1988）7月に鳥取藩台場跡として国の史跡に一括指定された。一方、県東部にあたる因幡国の台場跡としては、唯一浦富台場の保存状態が良く、平成10年（1998）12月に追加指定されている。赤崎台場と賀露・浜坂台場については現在遺構を確認することができない。

2. 資料から見る台場

鳥取藩台場に関する資料としては、藩政資料等の中に断片的に図面等が残されている。現段階で文献資料の原典にあたることは筆者の力量を超えるため、ここでは図面・絵図等の資料に若干の検討を加えるものとする。各台場の図面としては賀露・由良・赤崎台場の略図があり、由良台場は現存する台場跡の遺構と比較することが可能である。これらによると、平面形は海に向かって複数の稜を持つ多角形あるいは半円形に土壘を盛り上げて大砲を設置し、側面及び背面も土壘で囲み、内側に兵が駐屯できる区画を作っている。さらに前面土壘は大砲を据える「炮壇」、その前方に大砲と操作にあたる砲兵を艦砲の攻撃から防御する一段高い「護胸壁」、一段低い後方には連絡のための「往来」を設けている。平面多角形の場合は稜コーナー、円形の場合は正面と左右に「火薬庫」を設け、敵砲弾から守るために護胸壁より高い「火薬庫土手」を盛り上げている（第45、46図）。土壘で囲まれた平坦地には「コ」の字形の「土居」に囲まれた「武者溜」が設けられていたようである（第48図）。



第45図 赤崎台場之図（1167）

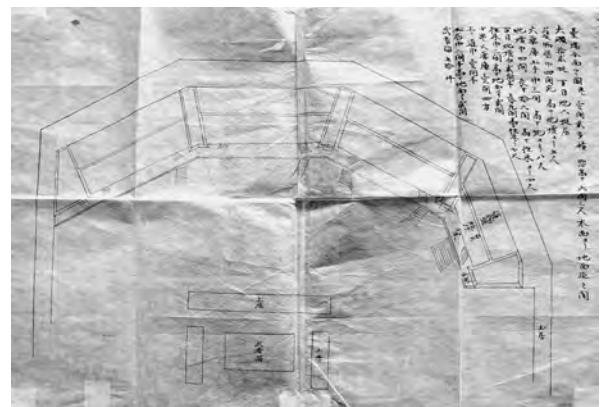


第46図 会見郡上道村御台場図（1171-2）

また、因幡・伯耆両国の海岸を持つ9郡の『因伯両国海岸調査絵図』（鳥取県立博物館蔵）にも8ヶ所の「御台場」が描かれている。伯耆国5郡の絵図は文久3年8月、因幡国4郡の絵図は翌元治元年（1864）7月のものである。この絵図で注目されるのは、因幡国では岩井郡（浦富台場）・邑美郡（浜坂台場）・高草郡（賀露台場）とも2ヶ所の台場が描かれていることである。このうち浦富、賀露台場については、2台場の平面形態が書き分けられていることからしても、絵図が不正確とは考えにくい（第47、52図）。既存の台場に加えて新たな台場が築かれたものと考えたいが、『高草郡海岸調査絵図』の賀露2台場の形狀は第48図の略図平面形と異なっており、さらなる検討を要する。なお、浦富台場については、位置・形状からみて、東側台場（国史跡）のみが現存していると考えられる（第52図）。



第47図 高草郡海岸調査絵図（賀露台場）

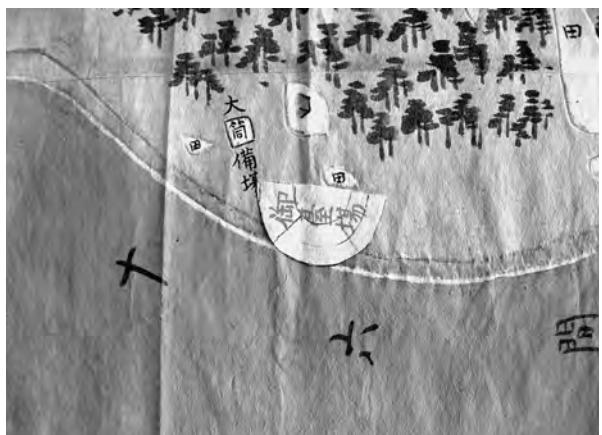


第48図 加路台場略図控（1170）

さらに浜坂台場についてみると、単純な稜堡式の2台場が描かれており、このうち内陸側の台場は海から相当離れ、砂丘を向いて道沿いに構築されていることから海岸台場とは考えにくい（第49図）。



第49図 邑美郡海岸調査絵図（浜坂台場）



第50図 八橋郡海岸調査絵図（赤崎台場）

『鳥取藩史』によると、文久3年9月7日に「浜坂傍示に野戦御台場二ヶ所築造につき」とあり、これに相当するものかもしれない。

一方、伯耆国では河村郡（橋津）、八橋郡（由良・赤崎）、汗入郡（淀江）、会見郡（境）に各1ヶ所の台場がみられるが、これらは当初から絵図に描かれたものではなく、形態を描き分けた台場が後から貼り付けられている（第50図）。これは伯耆国の絵図が作製された文久3年には各台場とも築造途中であったためで、特徴的に描き分けられた平面形態が、現存する台場と一致することから、完成後に貼り込まれたものと推定される。

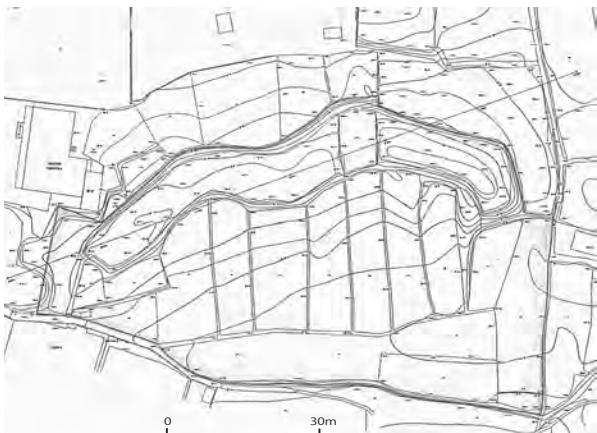
3. 現存する鳥取藩台場跡

ここでは現存する5台場について概要を記述する。

（1）浦富台場（鳥取県岩美郡岩美町浦富）

文久3年、鳥取藩執政職にあった鶴殿長道が自分手政治⁽¹⁾を行なう浦富の海岸に築造したものである。鶴殿氏が独力で築造した経緯は明らかでないが、幕末期の藩政を指揮した鶴殿長道が率先して台場築造に当たったものと考えるべきであろう。台場の規模は、東西約92mで、土壘の幅は10m前後、現存する高さは3m前後を測る。前方土壘の平面形は2ヶ所の突出部をもつ稜堡式である（第51図）。この台場には六尾反射炉で鋳造された12斤台場砲等4門の大砲が備えられていた。現在は「浦富お台場公園」として整備・活用されている。

なお、『岩井郡海岸調査絵図』には、この台場より西側の鶴殿陣屋の前面海寄りに「コ」の字形平面の別の台場が描かれているが、現在は畠地となっており、痕跡は確認できない（第52図）。



第51図 浦富台場跡平面図



第52図 岩井郡海岸調査絵図（浦富台場・右側が現存）

（2）橋津台場（鳥取県東伯郡湯梨浜町長瀬）

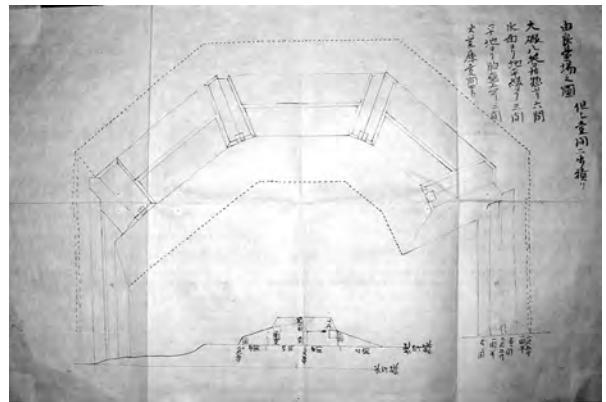
橋津台場は、藩倉のある重要港湾橋津湊に接する橋津川河口左岸に長瀬の大庄屋戸崎久右衛門以下が取締役となって築造したものである。『河村郡海岸調査絵図』に貼り付けられているのは「」形の土壘で、由良台場と同じく左右対称の構造である。前面砲台部分の土壘は波蝕により失われ、両側面と後方土壘（高さ4m）および目隠し土壘（長さ25m、幅4m）が残存しており、東西の規模は約138mを測る。橋津台場には18斤砲等4門の大砲が配備されたという。

（3）由良台場（鳥取県東伯郡北栄町由良宿）

由良台場は、藩倉のあった重要港湾、由良湊に接する由良川河口右岸に造られた。長崎で砲術家・高島秋帆に西洋砲術を学び、藩命により安政年間から六尾の反射炉で大砲鋳造を行なっていた瀬戸戸村の郷士武信潤太郎を総指揮者として築造に着手。藩財政窮乏のため費用は中・大庄屋、豪農らの献金によってまかなわれ、文久4年2月に完成した。台場の形状は東西125m、南北83mの長方形の前面（海側）の2隅を切った六角形となっている。前面砲台部分の土壘は高さ4.5m、底面の幅は35mを測る。護胸壁・砲台・往来の3段からなり、4隅に設けた地下火薬庫を護胸壁より高くした火薬庫土手で防衛している。また、側面2段、背面1段の土壘で囲まれた内側に広い駐屯地があり、南側中央には入口を設け、外側には目隠しの土壘を配している（第55図、写真39）。

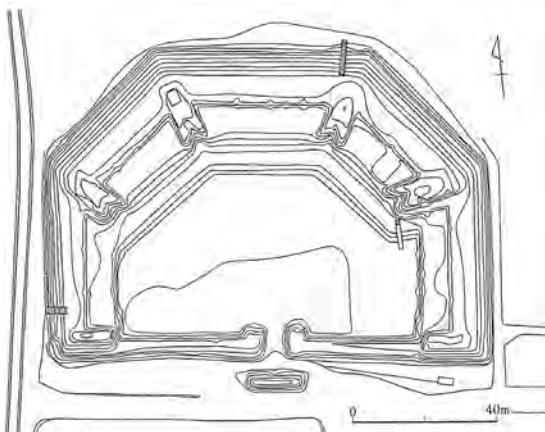


第53図 八橋郡海岸調査絵図（由良台場）



第54図 由良台場之図 (1168)

「由良台場之図」(第54図)からみると、竣工当初は前面砲台部分のみの〔形の台場であったものが、朱線で引かれている側面土塁や同図に見られない背面土塁等が増築・改修された可能性がある。「八橋郡海岸調査絵図」に貼り付けられているのは、その当初の姿と思われる(第53図)。由良台場には60斤砲など4門の大砲が配備されたという。



第55図 由良台場跡平面図



写真41 由良台場跡

(5) 淀江台場 (鳥取県米子市淀江町今津)

淀江台場は、藩倉のあった重要港湾淀江湊に面した今津にあり、長崎に留学して究理学(物理学)を学んだ松波宏元が設計したとされ、宏元の父である今津村大庄屋松波宏年が土地を提供している。文久3年11月には完成したとされる。遺構としては高さ約4m、幅約24m、長さ約67mの直線土塁が残るが、「汎入郡海岸調査絵図」に貼り付けられているのは、由良・橋津台場と同じ〔形である⁽²⁾ (第56図)。現存する土塁は最前面の砲台部分に当たると推定される(写真42)。淀江台場には18斤砲等3門の大砲が配備され、完成後は松波が率いる農兵隊が守備している。



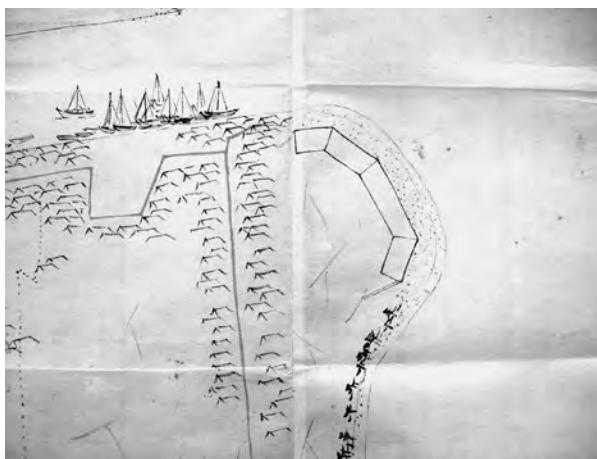
第 56 図 汗入郡海岸調査絵図（淀江台場）



写真 42 淀江台場跡

(6) 境台場（鳥取県境港市花町）

境台場は、中海が日本海に通じる境水道の入口、旧上道村に位置するため「上道御台場」とも呼ばれる。淀江台場と同じく松波宏元が設計し、大庄屋山根作兵衛の指揮により文久 3 年 8 月に着手され、翌文久 4 年の春に完成した。東側の日本海（現在は埋立地）に面した前面砲台は、幅約 25 m、高さ約 6 m の土塁が 3 つの稜を持ちつつ約 250 m 連続し、南及び西側を後背土塁で囲まれた約 1 ヘクタールの広場がある（第 57 図、写真 43）。築造に際しては現地が砂丘地のため土石が得られず、松江藩に交渉して、対岸の島根半島より山土と石を譲り受けたとされる。境台場には 18 斤砲など計 8 門の大砲が配備され、8ヶ所の台場の中で規模・装備では最大であったとされる。



第 57 図 上り道村台場図（境台場 1169）



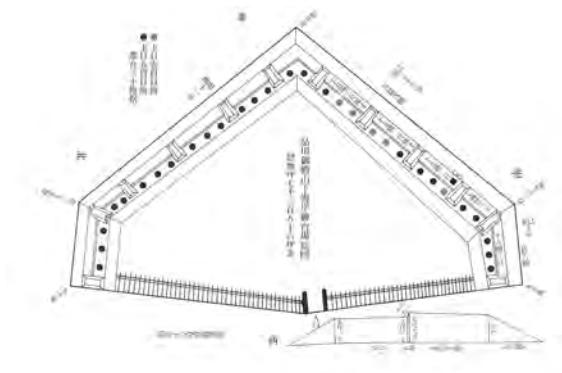
写真 43 境台場跡

4. 鳥取藩御台場の特徴

鳥取藩台場は、文久年間（1861～1863）に当時の我が国が置かれた国際情勢と幕府の打ち出した攘夷施策に対応して各藩が築造した台場のひとつであるが、各台場の完成に至る道筋は因幡国と伯耆国では一様ではなかったと考えられる。すなわち、藩主の居城である鳥取城を控えた因幡 3 台場が藩直営、あるいは自分手政治を執っていた有力家臣が構築・防備に当たったのに対して、伯耆 5 台場は藩命に対し攘夷思想に共鳴し、これを推進した武信潤太郎らの豪農や農民らが積極的に協力して築造し

たものであり、幕末期における鳥取藩内の情勢をよく示している。そのことは各台場の形態・構造の違いにも現われていると推定される。例えば台場前面砲台部の平面形は、A類（単稜型：浜坂台場－遺構は未確認）、B類（二稜型：浦富台場）、C類（多稜型：由良台場・境台場等）、D類（半円型：赤崎台場）など少なくとも4類型が混在して統一性がなく、多様な設計思想に基づき台場が構築されていることがわかる。この時期の各藩築造の台場は、嘉永期から安政期にかけて長崎や品川で蘭書を手引きとして築造された洋式台場が全国的に普及したものと考えられ、鳥取藩台場もその影響を受けたものと考えられる⁽³⁾。これらについては、武信など西洋築城術を学んだ技術者が築造に参加したことから、西洋式の城塞プランが採り入れられたものとされている（大栄町 1980）。

一方で、前述のように鳥取藩が品川御殿山下台場や大坂天保山台場の警衛を受け持っていたことも考慮する必要がある。実際の洋式台場から具体的な情報を入手したことは、それらの台場と鳥取藩台場の形状・構造に類似点を見出すことができることからも明らかである（第58, 59図）。鳥取藩台場は、全国諸藩が作った多くの台場が砲台座等の建設にとどまつたことからすれば、きわめて異色な洋式台場であり、幕末軍事史の理解に欠くことが出来ない遺跡なのである。



第58図 品川御殿山下海岸御台場絵図
（『台場』港郷土資料館 2004 より転載）



第59図 天保山御台場図（鳥取県立博物館蔵）

5. 松江藩十六島台場跡との比較～まとめにかえて～

松江藩十六島台場跡と総称される網屋浜台場跡と河下台場跡の2台場は築造時期が異っている。前者は寛政11年（1799）に「唐船」警備のために築造されたものであり、半島部の急峻な斜面裾に大砲を設置する平坦面を石垣によって構築した台場（砲座）と考えられる。鳥取藩においても簡易な砲座の設置はかねて行なわれたらしく、例えば前掲した第50図『八橋郡海岸調査絵図』を見ると、赤崎「御台場」以前に「大筒備場」があったことがわかり、海岸線を有する各藩は一定の海防意識を有していたことが窺われる所以である。これに対して、文久3年に築造された河下台場は、黒船来航に端を発する幕末期の攘夷思想に基づくもので、その規模・構造とも網屋浜台場とは区別され、本稿で取り上げた鳥取藩台場と同じ性格を有すると考えてよい。したがって、ここでは河下台場跡と鳥取藩台場跡を比較することとする。

鳥取藩台場の基本的な構造を境台場の断面（第46図）でみると、先に述べたように護胸壁、炮壇、往来からなり、護胸壁より高くした数箇所の土手の地下には火薬庫があって、往来に向けて出入口が

あったことがわかる。さらに、側面及び後背土塁に囲まれた広場は、守備兵の駐屯地であったと推定される。これに対して、河下台場跡では護胸壁と炮壇は整然としているが、連絡通路としての往来は明瞭ではない。また、現状では砲台の付帯施設である側面及び後背土塁と、それに囲まれた駐屯地についても確認できていない。このように比較すると、河下台場跡の構造は海岸砲台としては最小限の機能を備えたものといえよう。このことは台場の平面形からも窺える。鳥取藩台場が品川台場など当時の先進的な台場にならい、稜堡式の複雑な平面形を呈するのに対して、河下台場跡は海岸に面して緩やかな弧を描く砲台である。弧を描くといつても赤崎台場の半円型のような明確な設計意図⁽⁴⁾を持ったものではなく、海岸線の地形に沿った結果である可能性がある。

また、鳥取藩台場が砲弾の破壊力を吸収させるために厚い盛土によって土塁を構築するのに対して、河下台場は基本的に石張あるいは石垣で土塁を構築している点も異なっている。さらに規模の上では河下西台場跡が幅約 50 m 前後であるとしても、由良台場跡の 1/2 以下であり、護胸壁の高さも由良台場が現状で 4.5 m あるのに対して、河下台場跡では約 2 m にとどまっている。

このように松江藩河下台場と鳥取藩各台場は、ほぼ同時期に共通する目的意識のもとに構築された台場でありながら、規模・構造等には明らかな相違が認められ、河下台場に関する限り洋式台場としての完成度はさほど高くはない。松江藩は、享保 3 年（1718）の十六島湾における唐船打ち払いの経験を有し、寛政 11 年には網屋浜台場など 18 箇所の台場を設けて海防に努めてきた歴史がある。文久元年（1861）から設置された河下台場を含む新たな 4 台場も、技術的には、それらの延長線上にあるものと考えるべきかもしれない。これに対して鳥取藩では、水戸徳川家から養子に入って 12 代藩主となった池田慶徳が水戸藩の西洋砲術を取り入れた軍制改革を行ない、攘夷実行にも執着したことでも知られる。江戸・大坂での先進的な台場で警衛にあたった経験などを踏まえて、本格的な洋式台場が構築されたものと考えておきたい。

松江藩十六島台場跡は、個々の台場としては比較的小規模なものであるが、構築時期と規模・構造が異なる 2 台場が遺存しているという点において、江戸時代の諸藩における海防意識をさぐることが可能な資料であり、発掘調査を含む調査成果の分析が期待される。

本稿は島根県出雲市に所在する松江藩十六島台場跡の調査研究に資するために隣接する鳥取藩台場を紹介し、いくつかの点において比較を試みたものである。鳥取藩台場は国史跡に指定されているが、発掘調査等の考古学的調査がほとんど行われておらず、藩政資料等における台場関係史料の探求も未着手である。今後は考古学と文献史学の両方から、幕末期における洋式台場導入の実態解明が進むことが期待される。本稿の作成にあたって、鳥取県立博物館来見田博基学芸員に絵図史料調査の便宜を図っていただいたことを記して感謝する。

註

- (1) 鳥取藩では藩内数箇所の預け地の支配を重臣数家に託して自分手政治を行なわせた。浦富は着座家である鶴殿氏（6000 石）が天保 13 年（1842）から自分手政治を行なった（岩美町 2004）。

- (2) 淀江台場跡の発掘調査では、土壘が「形であった可能性が指摘されている。また、海側に小型礫による護岸が確認されているが、河下台場跡の石垣と比べると簡易なものであり、波蝕に対する最小限のものであったと推定される（淀江町教育委員会 1999）。
- (3) 我が国における洋式台場は、17世紀末から18世紀にかけてフランスの築城家ヴォーバンによって完成された稜堡式城郭を部分的に採用し、変形させて「台場」として採用したもので、佐賀藩及び伊豆堇山代官江川英龍がサヴァールの著作など複数の軍事技術関係蘭書を研究して設計・構築した長崎と江戸における先進的な洋式台場にその技術的系譜をたどることができるという（富川 2005）。
- (4) 半円形状の防壘の類例は少ないが、長崎の四郎島台場については、メルケスの築城書の中に類似する砲台図が見られることから、同書を参考に築造された可能性があるという（富川 2005）。

※各台場図面の番号は、鳥取藩政試料目録の登録番号（鳥取県立博物館 1997）

参考文献

- 出雲市教育委員会 2007 『河下台場遺跡』
- 岩美町 2004 『新編岩美町誌』
- 大栄町 1980 『大栄町誌』
- 鳥取県 1970 『鳥取藩史・第三巻 軍制志・学制志・儀式志』
- 鳥取県 1979 『鳥取県史・第三巻 近世 政治』
- 鳥取県教育委員会 1992 「鳥取藩台場跡」『鳥取県文化財調査報告書 16』
- 鳥取県立博物館 1997 『鳥取藩政試料目録』
- 淀江町教育委員会 1999 『淀江町内遺跡VII』
- 港区立港郷土資料館 2000 『台場－内海御台場の構造と築造』
- 鳥取県教育委員会 2004 「鳥取藩台場跡」『鳥取県文化財調査報告書 18』
- 富川武史 2005 「幕末期における長崎警衛と江戸湾防備－軍事技術関係蘭書による影響を中心に－」
『日蘭学会会誌』第30巻第1号 財團法人日蘭学会
- 富川武史 2006 「品川御殿山下台場の築造と鳥取藩池田家による警衛」
『品川歴史館紀要』第21号 品川区立品川歴史館